



営農NEWS



麦の多収をめざして ～播種までの取り組み～

本県の麦類の10a当たりの平均収量は小麦は308kg、二条大麦は248kg、六条大麦は233kgと低い水準にあり、まだまだ改善の余地があります。麦の多収・高品質のためには出芽率を良くして、早い時期に莖数を多く確保し、初期生育を旺盛にすることが大事なポイントです。

1. 排水対策の徹底

本県の麦は、約7割が水田（転換畑）で栽培されており、低収の大きな原因の一つは湿害です。特に出芽時や登熟期（出穂から成熟まで）の湿害は、生育を極度に抑制したり子実の充実を悪くしてしまいます。排水をよくして湿害を回避することが基本です。

排水対策には暗渠の設置とともに、効果を高めるために弾丸暗渠やサブソイラなどの補助暗渠を取り入れることも必要です。また、圃場表面の水を速やかに排水することも大変重要です。明渠を掘り排水口につないで、速やかに排水するようにします。圃場に合わせた排水対策を考え、計画的に取り組みましょう。

2. 土壌の改良など

- 1) 作土の酸度はpH(KCL)5.5～6.0になるように、苦土石灰または消石灰を施用して矯正します。大麦は小麦より酸性に弱いので注意します。
- 2) 作土の有効態リン酸は、乾土100gあたり10mg以上となるように、ようりんや重焼りんなどの資材を施用します。
- 3) 砕土が不足すると出芽不良になるので、2cm以内の土塊が70%以上になることを目標に、ていねいに耕うんします。
- 4) 土作りのため、10aあたり堆肥を1t程度施用します。

3. 種子消毒

麦類で種子伝染する重要な病害として「なまぐさ黒穂病」、「裸黒穂病」、「斑葉病」、「条斑病」などがあります。これらが発病すると生育不良や品質の低下、大きな減収を招くばかりでなく、販売も困難となる場合があります。播種を行う前に種子の消毒をしておく必要があります。

表1 麦類の主な種子消毒薬剤と処理法ならびに対象病害（令和元年9月24日現在）

薬剤名	処理方法	なまぐさ黒穂病	裸黒穂病	斑葉病	条斑病	分類
トリフミン水和剤	種子重量の0.5%種子粉衣	○	○	○		3
ベフラン液剤25	乾燥種子1kgあたり原液3～5ml種子吹き付けまたは塗沫	○		○ (小麦を除く)	○	M7
ベンレートTコート	乾燥種子重量の0.5%種子粉衣	○	○	○	○	1とM3
ホームイ水和剤	種子重量の0.5～1.0%種子粉衣	○		○		1とM3

注) 分類欄にはFRACコードを記載しました(コードが2つは混合剤)。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

4. 適期播種の徹底

小麦「さとのそら」「きぬの波」は11月上～中旬が、二条大麦「ミカモゴールドン」、六条大麦「カシマムギ」「カシマゴール」は11月上旬が播種適期です。適期に播種されたものは、莖数が多くなり生育が旺盛になり、収量・品質が高くなりますが、播種期が遅れると、出芽率も低くなり十分な生育量が確保できず、穂数も低下するため、収量・品質が低下します。天候や作業の関係でやむを得ず播種が遅れる場合でも、11月一杯に作業が終わるようにしましょう。

5. 適切な播種深度を

播種深度3cmは出芽までの時間が早く、出芽率も高く、莖数が多くなります。それに対して、深さ5cm以上の深播きにすると出芽までの時間がかかり、出芽率が低くなります。また、莖数も少なくなり収量・品質が低下します。適切な播種深度になるように、毎年播種機の調整をしましょう。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040